

会 師 医 市 牧 小 苦
 師 医
 池 菊

晃

息 喘 支 管 氣

アレルギー疾患の一つで内科、小児科でしばしば対応しなくてはならない気管支喘息（ぜんそく）は気道炎症として認識され血中の好酸球やリンパ球の炎症細胞を主とした気道への細胞浸潤とある種の化学因子が明らかにされつつあります。深夜に喘息発作を生じて診療を求められ、診（み）るとその発作は既に軽快して来ている時もある

予 防 的 治 療 が 最 も 有 効

により軽快しますが、さらに以後の再発防止を必要とします。汗ばんで会話も困難で喘ぐ努力性呼吸困難は十分に痰（たん）の喀出（かっしゅつ）されるまで続く急性病であり、その発作の程度も軽症から重症までさまざま、繰り返す発作のため慢性病でもあります。種々の吸入薬や気管支拡張薬、去痰剤、点滴静注による脱水の改善、さら

り、また、ある時にはつい先ほど診療を終え、いったん帰宅したはずの人が再び強い発作を生じて再来されることもありま

す。「ゼイゼイ、ヒューヒュー」と喘鳴、呼吸困難を繰り返す状態を気管支喘息と診断し、その発作が自然にあるいは薬剤により軽快消失すれば日常生活が可能となる病気で、内科救急疾患として迅速（じんそく）な対応

件、不安緊張なども関連し多くの誘因が考えられています。夕二やかび、室内塵、花粉などの誘因も抗原刺激として関連していることから、問診上症状発現に関する印象や家族歴、季節性、職業、住宅や生活環境、大気汚染、妊娠の有無などその誘因検索が重要となり、これらを把握することも喘息発作時の対処と予防の第一歩となります。そして発作時の治療を十分に強化し、さらに非発作時の治療として吸入ステロイド剤の使用などで予防と管理をすることが肝要です。

生涯に一度しか発作を経験しない人や、また、毎日発作を繰り返す人、季節的に生じる人もおられることでしょう。感冒を早期に治療し、少しでも誘因を回避し、いち早い喘息発作の改善と以後の予防管理が大切です。強い咳や呼吸困難を生じる時はいつでも早めに受診しましょう。

気管支喘息

そして良くなつたと勝手に服薬を中止しないで薬剤や吸入の指導管理を守るべきです。喘息治療の一つとして予防的治療の重要性も認識することが大切です。これがQOL(生活の質)を高めることとなります。



お問合せは、苦小牧市医師会
電話 33-4720へ